大丈夫よ！お母さん！

vol.32

教育コーディネーター　中西美沙子

（今回のテーマ）

緑、滴る季節の中で

庭のウツギの花の姿が消えると、初夏の風が吹くようになります。季節の色彩も「白」から「緑」へと、足早に変わりました。

「時を待たない」という言葉があります。「時」を「子どもの成長」と置き換えてみると、子どもたちの成長も、刻々と変わり「再び帰ることのない生」を懸命に生きていると感じられます。

先日、私の主宰する教室に、あるお母さんがやってきました。小学6年のお子さんが「書くことが苦手で」と。その折りの言葉に、心を惹（ひ）かれるものがありました。それは「あるがままに引き受ける」ということでした。下の子（小学3年）が自閉症だと、極めて自然な口調で彼女は語りました。言葉の読み書きが苦手で、コミュニケーションも取りにくいと。

私が心を打たれたのは「障害があることで、姉妹が人に優しくなれたら」という言葉でした。この頃、子どものちょっと変わった行動に関心を持つ親が増えているようです。自閉症やアスペルガーという言葉も多く聞こえてくるようになりました。自分の子どもに対して細心であるのは、大切なことです。しかし敏感になりすぎて、過大に恐れを抱くようになることもあります。

「あるがままに引き受ける」ということは、子どもが持っているものに寄り添うということでしょう。

強い子やひ弱な子。言葉を結べない子やこだわりの強い子。子どもが持っている特性は無限です。私たちができることは、子どもの特質を細心にみて、それを活かしていくこと。足りないものを指摘するより、褒めることが大事では？　子どもを見ていてマイナスと思える時は、自分たちが作った環境がそうさせるのではないかと考えることも必要です。自閉症やアスペルガーの子どもは、「親の理解の深さ」があれば、どのようにでも生きて行けます。でも、「理解しない、したくない親」の場合は、子どもにとってつらいことが起こります。

日本人は障害を恥と考える傾向があります。社会の意識や医療がこれだけ進んでも、心の底で障害を受け入れることをしない人たちもいます。

ジェンダー論で名高い上野千鶴子は、「当事者主権」という本で「誰もが当事者になる」といっています。当事者とは、障害者と置き換えてもいいでしょう。社会を弱者の目線で見ることをいいます。元気な人も歳をとれば誰もが「障害者」になる。耳は聞こえにくく、手足も衰えますから。その地平で社会が作られていれば、誰もが生きやすい社会になるのでは、と上野はいっています。その考えは、心の問題とも関わりがあると私は思っています。

「障害があることで、姉妹が優しくなれたら」。あの女性の言葉から想像できるものは、姉妹、家族や社会が優しくあれば、誰もが優しく生きることができるということです。

初夏を形容する「緑滴る」。若葉と若葉が重なり、緑の山となる景色を日本人はそう表しました。生命を賛美する感覚は、子どもの姿にも重なります。どの子も懸命に生きている。そして「あるがままの子ども」を見つめる親がいて初めて、「命の輝き」は動き出すのでしょう。

Profile

教育コーディネーター

中西美沙子

静岡大学客員教授。文章教室「スコーレ」画廊「キューブブルー」などを主宰。文章教室は書き方を教えるだけではなく、生き方や考える視野を学ぶところです。

問 tel 053-456-3770

中西美沙子　検索

ピアニシモでね

中西美沙子 著

著書の「ピアニシモでね」（東京書籍）は、中日新聞に連載された人気コラム「つかまえて！こころ」をまとめたもの。同著には、親子の問題もいろいろ描かれています。（税込1,500円）

※お求めは浜松市内の谷島屋で。